

第十一章 恐怖と不信 『行人』

『行人』は漱石の「空前の大小説」(注1)とまで言われてきたテキストだが、そこに書かれていた観念の劇がもはや現代人の心を動かさなくなってきたことを、たとえば二〇〇二年秋に出された『漱石研究』16号の『行人』特集は見せつけている。そこで言われている様々な批判はおおむね正鵠を射ているといいだろう。ただし、それらの多くは一郎に対する表層的批判に集中するにとどまっていて、そのような一郎の行動様式が何ゆえのものだったかについての考察はあまり見られない。

たとえば、三浦雅士は一郎の苦悩自体を笑い飛ばしながら「一郎の苦悩が現実的なものであったとしても、それがどのような形で妻への疑惑に結びつくのかまったく不可解」(「恋愛と家父長制」として、「不可解」の背後までは関心が及んでいないようなのである。しかし、悩める一郎をただ突き放すだけでは「『行人』を理解したことにはならないだろう。一郎の苦悩は果たして何ゆえのものなのか。本稿ではまずその問いに忠実でありたいと思う。

一、「女」という他者

『行人』の大枠を妻の愛を確認したいのにそれが出来ずに苦悩する若い知識人の物語とすることに異見はないであろう。

しかし、兄への気持ちを聞く二郎に対してお直はつねに「分からない」としか言わない。それはおそらく、お直自身、自分の気持ちを確認出来ないからだろう。一郎は妻の〈愛〉を所与・不変のものと考えているが、二人の間には、すでに指摘されているとおり、はじめからいわゆる「恋愛」的「愛」が存在していたわけではないのである(注2)。つまり、見合い結婚したお直にとっては一郎への「愛」はまだ確認しえないものなのだ。

そういう意味では、一郎が望む「愛」は、お直にとっては一郎との〈関係〉のありようではしか測ることのできないものである。単純に言えば関係の良好如何によってしかお直は自分たち夫婦の間の「愛」を確認しえなかったはずなのである。しかし一郎は、あくまでも「愛」を先験的に存在すべきものと考えていて、その限り、一郎とお直のすれ違いは深まるほかない。

「愛」を所与のものとする一郎は、それを確認させてくれない妻への「不信」に陥り、

ついには妻を<試験にかける>ことまで思いつく。そしてその底辺には「妻」以前に「女」に対する根深い不信があった。

それは一郎に限ることではない。たとえば「友達」には、夫に離縁し三沢のところに身を寄せることになった美しい女が三沢に好意を表したことをめぐって、それが本当の気持ちなのか、病んでいる精神病のせいなのかと議論する場面がある。そこで三沢は、「病人」のことなのでその気持ちは「誰にも解かる筈がない」(友達三十三)としながら、「僕は病気で何でも構はないから、其娘さんに思はれたいのだ。少なくとも僕のほうではさう解釈してゐたいのだ」(同)と語る。

三沢の言葉はそのまま、お直をめぐる一郎の気持ちでもあったはずだ。「病気で何でもいいから」ともかく女に「思はれた」く、確認できないにもかかわらず「さう解釈したい」とする言葉は、「愛」の主体となるのではなく、あくまでも客体となっていたい、つまり<愛されたい>欲望を示すものである。

しかし、女は「死んだ」(同)ことになっており、その気持ちを確認するすべがないという構造をテキストはとっている。言うならば、「友達」における「あの女」の挿話が語るのとは、気持ちを確認できない「女」の不可解さである。精神病が死に至る病気とは限らないにもかかわらず、テキストがそのことに関する十分な説明もないまま「女」を「死んだ」ことにしてしまうのは、「女」の気持ちをあくまでも「不可解」なものにしておきたい作者の無意識の意図によるものだろう。そういう意味では、「友達」は、もう一人の不可解な「女」お直の登場のために用意された序章と言える。

実際、一郎はこの話に興味を示し、二郎に「本当に彼の男を思つてあたか、又は先の夫に対して云ひたかつた事を、我慢して云はずにみたので、精神病の結果ふらふらと口にし始めたのか、何方だと思ふ」(兄十二)のかと聞いている。一郎自身の解釈は「世間の手前とか義理とかで」言えないようなことも「精神病」になると「気が楽になる」ので三沢への気持ちを表現した「誠の籠った純粹のもの」とするものだった。そして一郎は、「噫々女も気狂にして見なくちや、本体は到底解らないのかな」(以上同)と嘆くのである。

一郎にとって「女」の気持ちとは、正常な状態、すなわちその主体の理性が働かずに自己制御出来なくなったときぐらいにしか覗けない、理解を拒むものである。すなわち、一郎におけるお直の問題とは、単にお直という「妻」との関係に限るものではなく「女」全般に対する「男」側の、<理解不能>という恐怖に基づくものといつていいのである。(「女」を「気狂」にして)「女」という種族から自己の発言や行動を統制する自己制御能力(自己

に関する表現能力)を奪ってみたいとする一郎の欲望は、後に、お直に暴力を振るった時お直が示した冷静さに苛立ち、「抵抗」してくれることを望んだとする発言からも伺えよう。

むろん、一郎の分析が正しいかがさしあたり問題ではない。問題は、一郎にとって「女」とは「世間」や「義理」のために「本体」を隠している種族のように見えたこと、そしてそのように自己統制できる「女」の理性が一郎には我慢ならなかったということにある。おそらく、知識を身につけている<文明人>一郎にとって「女」とは、精神病にかかるかでもして自己統制できなくなるような、<自然人>であるべきなのだ。

すでに明らかのように、一郎は妻の心が解らないとして煩悶しているが、それはお直にその原因があるというより、一郎自身の「女」に対する過剰な警戒と不信によるものである。早くから、漱石テキストにおける女たちが「不信」を招くような存在として描かれていたことを思い起こしておいてもいいだろう。『三四郎』では、冒頭において夫のいる見知らぬ女が三四郎を誘惑していたし、広田先生は「母が死ぬとき、別の父がいたと告げられる男の話」(十一)をしながらか「その子が結婚に信仰を持たなくなるのは無論だろう」と語っていた。そして「そんな人は滅多にないでしやう」という三四郎の反論に対して「滅多にはないだらうが、居ることは居る」と、ゆずらない。女主人公である美禰子はといえば、二人の男に気を持たせておきながら最終的には別の男に嫁ぐような女として描かれる。

『坑夫』における青年が突然厭世的になって世を棄てたのも、思えば「女」が原因だった。いいなづけがいたにもかかわらず別の女を愛するようになって青年は困っているが、その女は「少しもやめて呉れないで、無闇に伸びて見せたり、縮んで見せたりするもんだから」(十二)自分の気持ちを人に隠せない状況を作っている。「女」は、青年を破滅に導く存在として描かれていたのである。

『行人』の前作である『彼岸過迄』の「須永の話」には、すでに『行人』における問題構図がすべて出ていたとあっていい。須永は千代子の態度に関して「わざと近寄つたり、わざと遠のいたりするのではなからうかといふ微かな疑惑」(二十五)を感じ、のちには「彼女の技巧を疑ひ出した」(三十一)。高木をめぐる千代子の行動に関して「高木を媒鳥に僕を釣る積もりか」(三十一)と疑うのである。

このように、漱石テキストには「女」は魔物として表象されている。むろん、『こゝろ』の「お嬢さん」もそうだったし、立場を変えるなら『それから』の三千代も、『門』の御米も、「男」を裏切り「不倫」に走った女たちである。そして『行人』においても信頼できない「女」はまたもや登場していたのである。

二、恐怖と不信

『行人』におけるお直「女」が、その気持ちを想像できないものとして描かれるのは男たちにとって女が恐怖的な存在だったからといい。お直は二郎にとっても、予期しない事態を前に落ち着いていられる存在だった。それは和歌山で二郎に向かって「何時でも覚悟が出来てゐる」(兄三十八)と語るような腰の据わり方や「死ぬ事丈は何うしたつて心の中で忘れた日はありやしない」という告白に現れている。二郎はそのようなお直を前に次のような感想を持つのだった。

自分は嫂の後ろ姿を見詰めながら、又彼女の人となりに思ひ及んだ。自分は平生こそ嫂の性質を幾分かしつかり手に握つてゐる積りであつたが、いざ本式に彼女の口から本当の所を聞いて見やうとすると、丸で八幡の藪知らずへ入つた様に、凡てが解らなくなつた。

凡ての女は、男から観察しやうとすると、みんな正体の知れない嫂の如きものに帰着するのではあるまいか。経験に乏しい自分は斯うも考へて見た。又正体の知れない所が即ち他の婦人に見出しがたい嫂丈の特色であるやうにも考へて見た。兎に角嫂の正体がまったく解らないうちに、空が蒼々と晴れて仕舞つた。自分は気の抜けた麦酒の様な心持を抱いて、先へ行く彼女の後ろ姿を絶えず眺めてみた。

突然自分は宿へ帰つてから嫂について兄に報告する義務がまだ残つてゐる事に気が付いた。自分は何と報告して好いか能く解らなかつた。云ふべき言葉は沢山あつたけれども、夫を一々兄の前に並べるのは到底自分の勇氣では出来なかつた。よし並べたつて最後の一句は正体が知れないといふ簡単な事実に戻する丈であつた。或は兄自身も自分と同じく、此正体を見届けやうと煩悶し抜いた結果、斯んな事になつたのではなからうか。自分は自分が若し兄と同じ運命に遭遇したら、或は兄以上に神経を悩ましはしまいかと思つて、始めて恐ろしい心持がした。(兄三十九)

ここで二郎は「女」は分からない存在だとしている点で一郎とほとんど同じ場所にいると言つていいだろう。お直のことを分かっているつもりだった二郎は、お直との対話以後かえってお直の「正体が解らない」と考え、「恐ろしい心持」までをも抱くにいたる。二郎が以後兄の家を出るようになったのは、兄とのいさかいだけでなく、このような、親近感

が恐ろしさによってしまったお直への感情も手伝っていたと言っていい。二郎は明らかに一郎に同化しており、お直はここで、「兄以上に神経を悩まし」かねない存在と認識されるのである。

だからこそ家を出てからも二郎にとってお直のことを考えることは「愉快」であると同時に「不愉快」なことであり、二郎自身を「柔かい青大将に身体を絡まれるやうな心持」（「帰ってから」一）にさせる存在であるだけでなく、「寝てゐる」兄を「ぐにやへした例の青大将が筋違ひに頭から足の先迄巻き詰めてゐる如く」であり、「その巻きやうが緩くなつたり、堅くなつたり」するたびに「兄の顔色は青大将の熱度の変ずる度に、それから其絡みつゝ強さの変ずる度に、変」ってしまうというような被害妄想とともに連想される存在なのである。

一郎や二郎にとって「女」は「正体の知れない」「恐ろしい」存在である。そしてその背景には男の想像の範囲を超える行動や言葉を「強さ」ゆえのものとする思考がある。お直が例の「立枯れになる迄凝としてゐるより外に仕方がない」と訴える時も二郎は何よりもまず「気の毒そうに見える此訴への裏面に、測るべからざる女性の強さを電気のやうに感じ」（「帰ってから四」）さらには「此強さが兄に対して何う働くかに思ひ及んだ時、思はずひやりとし」（同）たというのである。

二郎が嫂の突然の訪問に対して「喜びの驚きよりも不安の驚き」（二）を感じ、お直の態度に対して「大胆過ぎる」と思ったり、逆に「相手から小胆と見縊られてゐる」のではないかと思うのも、二郎には「女」が恐ろしかったからである。そしてその恐ろしい気持ちは、大体において「女性の強さ」を目の前にした時に生じる。二郎が、一郎の健康状態に対する質問に「冷淡な彼女」の答えを「美しい己の肉に加えられた鞭の音を、夫の未来に反響させる復讐の声とも取れる」とし、「自分は怖かった」（「帰ってから五」とするの、そこにお直の強さを見たからである。

そもそも、お直は「男子さへ超越することの出来ないあるものを嫁に来た其日から既に超越してゐた」「始めから囚はれない自由な女」であり、お直の行動は「何物にも拘泥しない天真の発現」（「帰ってから六」と認識されていた。お直は「あの落付、あの品位、あの寡黙、誰が評してもしつかりし過ぎたもの」なのだが、それは同時に「驚くべき凶々しいもの」だとされる。お直は「忍耐の権化」であるが「其忍耐には苦痛の痕跡さへ認められない気高さ」があり、「眉をひそめる代わりに微笑し」「泣き伏す代わりに端然と坐」（同）るような女性として描かれる。それはお直の強さを称揚しているかのように見えるが、のち

一郎が暴力を振るうのがまさにそのようなお直だったことを考え合わせると、その強さがある瞬間男たちを恐怖させていたという点では、決して肯定的だったとは言えないのである。

すでに『彼岸過迄』において千代子が「恐ろしい事を知らない女」であり、「僕は恐ろしい事だけを知った男」(「須永の話」十二)「強い刺激に充ちた小説を読むに堪へない程弱い男」(同二十五)であって、「恐れぬ女と恐れる男」の構図が出ていたのは周知の通りだが、実は『行人』においてもまったく同じことが描かれていたのである。

三、教育と支配

しかし、「男」にとって望ましい「女」とはお直のような「強い」女では決してなく、たとえば「宅で一番欲の寡ない善良な人間」(塵勞四十九)と一郎に思われていて「相応の年をしてゐる癖に、宅中で一番初な女」で「何を云つてもぢき顔を赤くする所に変な愛嬌がある」(帰ってから三十三)と二郎に思われているお貞のような女である。三沢の紹介した見合い相手をめぐって「何でも遠慮さへすればそれが礼儀だと思つてゐる」ことを難じる二郎にたいして三沢は、奥さんにするなら「あゝいふのが間違がない」と言っていたし、一郎は、女は「嫁に行けば」「邪になる」としながら「幸福は嫁に行つて天真を損はれた女からは要求出来るものぢやない」(塵勞五十一)としていた。

すなわち、『行人』の男たちにとって「女」とは、「相応の年」をかさねてもなお「初」で「天真」でなければならず、「何を云つても」異議申し立てをするのではなく、「顔を赤く」するだけの恥じらいを備えていなければならない。「遠慮」してばかりいるのは現代女性の魅力には欠けるかもしれないが、家族として迎え入れるならそれは美德になるのである。

「女」にたいするそのような〈期待〉は、実は必ずしも「男」だけのものではない。一郎たちの母親もまたお直の冷淡さを非難しながら「此方は女だもの。お直の方から少しは機嫌のお直るやうに仕向けて呉れなくつちや困る」とするのだから、「女」もまた、ジェンダ - としての「女」を十分に内面化していたと言えるだろう。

漱石テキストにはこのような、もうひとつの「女」像も繰り返し描かれている。『二百十日』でも「圭」は下女に対して「単純でいい女」としていたし、『彼岸過迄』でも須永は「下婢の女らしい所に気がつ」(二十六)き、「気安い、大人なしやかな空気を愛」するの

だが、その理由は「心の中」が「簡略に出来上がって」(二十九)いるように見えたからだった。むろん、このような「下女」の系譜の頂点に『坊つちやん』の清がいるのは言うまでもない。いうならば、男たちが「何を云つても」(しても)、清のように無条件に受け入れてくれる「女」こそが漱石テキストでは理想とされているのである。

ところが、このような、理想的な女たちが、「教育」を受けてない場合が多いことに注目しておこう。先の『二百十日』では、「圭さん」は下女のことをほめながら「田舎者の精神に文明の教育を施すと、立派な人物が出来る」(三「圭の話」)と言い、「碌さん」は「そんなに惜しけりや、あれを東京へ連れて行つて、仕込んで見るがいい」と言っていた。「教育」は必要であるが、「田舎者」の純朴な状態は毀損されてはならない。そのような「田舎者」に対する期待がどのようなものかに関しては第四章で述べたが、それは、都会人の支配圏を超え出ることを恐れてのことでもある。

そして、『行人』をはじめ漱石テキストで「分からない」女たちが恐れられていた理由もまさにここにあると言っていい。一郎や二郎がお直に対して、あるべき「本体」を想定してしまうのは、お直が男たちが考える自明の女性観 性関係と心の函数関係、「愛嬌」があることにおいてのみ主体的であること、、、 に収まらない部分を持っていたからにほかならない。むろん、苦痛を我慢して泣いてわめかないような理性も、「女」のものであるべきではない。一郎の言う「レデー」とは、女でありながら<野蛮>で<自然>であることをやめ、規範を受け入れた 「教育」を施された 人の謂いである。なにしろお直は一度結婚した身としては不幸な境遇でも「凝つとして」いるしかないと自己規制をしているような女である。暴力に対抗しないお直を称して一郎が「レデー」という、いかにも規範的な言葉を与えているのはまことに的確な言葉だったと言えよう。

しかし一郎が欲するのは「レデー」以前の 自然 =原初としての女性であり、その限り「教育」を受けた理性人たろうとするお直との距離は縮まることはないだろう。お直にとっては自己規制する自分の姿こそが「本体」なのであり、それは夫に抵抗しない<女>の規範を身につけたゆえの結果であるはずだ。しかし、自己規制出来る女が女の「本体」でありうるとは考えない一郎には、それはあくまでも「偽り」でしかないのである。

「単純」な女が好まれるのは、その女たちをお直などと違って「分か」ることができるからである。いうならば、「分かる」ということにおいて(心を)支配できるという感覚こそが『行人』ほか漱石テキストの男たちを安心させてくれるものだが、それに反してお直はなお「分からな」い。そこで一郎は、心を攪乱させられる苦痛に耐えられず、お直の「心」

を知りたいと思うのである。恐れは、他者を（心を）支配できる瞬間、安らぎへと変りうるだろう。お直の心を知らないがために「居ても立つても」いられないという一郎の「知る」ことへの欲望は、お直を支配したい欲望でもある。

「知る」ことは「支配」の条件である。「節操」を試そうとしたのは<男をだます女>への恐怖ゆえのことだが、一度性的関係が成立すると女はいつまでも男を慕うと一郎が考えるのも、ある意味ではそのためにほかならない。一郎の暴力は、ついに認識不能に陥り、支配への自信を完全に失ってパニックに陥ったためのことである。スピバックが『文化としての他者』で「コード化不能」と呼んだものを前にしての、新たな恐怖の発露とも言えるだろう。（殺されるかもしれないと思う）「不信」のために、人が他者に攻撃を加える仕組みとそれは限りなく似ている。しかし、「教育」のない女が、「教育」を受けるとしても「女」となる教育を受けている女なら、男たちの脅威になることはないだろう。漱石テクストにおける、二つの相反する「女」の表象は、まさにそのことの表れなのである。

一郎にとって「科学」がどうしようもない「不安」の対象であるのも、一郎が「未知」の領域に対して「恐れ」を抱くような「男」だったことと無関係ではない。近代の特徴のうち「産業主義」とは、それまでの、人や動物に代わって「無生物的動力源」が使用されたことだったとギデンズは定義しているが（『近代とは如何なる時代だったのか』76頁）人や動物の「単純」さにくらべ、「汽車」や「飛行機」のような「無生物的動力源」は、それこそ「何処迄伴れて行かれるか分らない」もので「実に恐ろしい」ものだったのである。理解を超える領域に対する「不安」と「恐れ」において、『行人』における「女」と「科学」は同じレベルにある。

四、「士人」の交わり

<期待>を充足させてくれない「女」にたいする不信から逃れられない一郎が「男」に期待し、信頼を寄せるのは当然だ。何しろ一郎は妻が好いているかもしれないと思う相手にまで、妻の「節操を試す」などという大変な役目までをもまかせているのである。その理由を一郎は「御前は幸い正直な御父さんの遺伝を受けてある」し、「近頃の、何事も隠さないといふ主義を最高のものとして信じてあるから」だとしている。二郎の「奥の奥の底にある御前の感じ」（以上兄十八）を聞きだそうとし、「己と御前は兄弟じゃないか」と迫る一郎が、夫婦という男女間の縁よりは血縁に基づいた男性同士の縁のほうに信頼をおい

ていることは確かである。「お直」を男同士の「絆」外の人として排除しているという指摘（注3）は正しいのである。

そして多少の疑いを見せたあとに語った謝りの言葉も「御前の言葉を疑ぐるなんて、まことに御前的人格対して済まない事だ。どうぞ堪忍して呉れ」（十九）というものであった。これは、一郎はお直に対してはそのような無条件的な信頼など一度も寄せてなかったことと対照的と言うべきだろう。

一郎の不幸は、「御前の心は己に能く解つてゐる」として同性には信頼を示しながらも「他」という「女」の「心」は分からないと思ったことから始まっている。「考へ過ぎ」とする二郎の言葉に対して「向ふでわざと考へさせるやうに仕向けて来るんだ。己の考え慣れた頭を逆に利用して。何うしても馬鹿にさせてくれないんだ」（兄二十）と言うような、「女」一般にたいする不信の結果でもあるのである。ここでの一郎の言葉が、『彼岸過迄』においての、須永の千代子に対する言葉、そして『坑夫』における青年の「第二の女」に対する疑惑と不信の言葉と酷似していることも注目しておこう。

二郎に多少疎んじられながらも、一郎はさすがに二郎には絶対的な信頼を寄せ、「御前の潔白は既に御前の言語が証明してゐる」ので「御前を信用してゐる」（兄二十四）と繰り返す。

最終的には二郎にも「士人の交はり出来ない男」（帰ってから二十二）と宣言するが、一郎が「男」という同性に絶対的な信頼を寄せていることは確かである。そして二郎やHも、一郎の苦悩が「女」にたいする不信ゆえのものとは考えず、一郎の理解者に廻る。一一郎の苦悩は理解を超える「女」にたいする不信と恐れからの「不安」に発するものだったが、Hはそれを、すべての嘘を見抜く「知恵」（塵勞五十）ゆえのことと解説する。それはあくまでも人間の避けられない「孤独」（塵勞三十六）の問題であり、普通の人たちがそのような「孤独」や「不安」に陥らないのは、一郎ほどの「神経」の「繊細」さ、ものごとを知る「知恵」-「知性」の不足ゆえのことにすぎないというのである。「美的にも知的にも乃至倫理的にも自分程進んでゐない世の中を忌む」、孤高の犠牲者として、一郎は位置付けられる。一郎が「正直」であるかどうかに関し人一倍敏感であったことに関しては、早くから二郎によって「大小となく影で孤鼠々々何か遣られるのを忌む正義の念から出るのだ」（兄七）と解説されていた。『行人』が、「女」の気持ちを一方では稀有の想像力でもって描きながらも、最終的には「男」共同体の物語となったしまったゆえんでもある。

理解されないかもしれない主人公のためによき解説者が登場するのは『彼岸過迄』でも

すでにみられることである。疑い深い須永は、松本によって「世の中と接続するたびに、内へどぐるを巻き込む性質」(「松本の話」一)だけれど、それは「あまり考へすぎて頭も身体も続かなくなる迄考え」(同 四)のような「知」の持主だからであり、そのような須永はもともと「在来の社会を教育するために生まれた男」(同 二)と言われていた。ところで、一郎のお直にたいする貞操試験は、第八章で見たように、不倫を恐れる、国家の発想に基づいてのものである。「父」のわからない子が「私生児」(公的ではなく私的に、つまり父によって認知されないだけでなく国家にも認知されない)として差別されたのは、家父長制を混乱をきたすゆえのことであるはずだ。種のわからない子の存在に対する男の不安は、そのまま「純潔」にこだわる国家の不安でもある。不倫に走る女とは<秩序>を壊す存在であり、反国家的存在でもあるのである。

『行人』における「女」への不信、そしてそれに対抗すべく支えあう男共同体の物語は次の作品『こゝろ』にも引き継がれていけよう。『行人』は『彼岸過迄』の「須永の話」を拡大した物語とも言えるのだが、その苦悩が何ゆえのものかがまだ作家に見えてないからである。そして最後の作となった『明暗』においても清子は心の内を説明することもなく男を裏切る女であったし、かつての恋人津田との温泉での再会で「不倫」に踏み切る可能性は少なくない。津田は、そういう意味では三四郎や野々宮の後身である。漱石テクストでは、またもや「女」は、信頼しえない「恐ろしい」存在となるであろう。

注)

- 1) 小宮豊隆「『行人』」(決定版『漱石全集七』「解説」、1937・1)。後『漱石の芸術』(1942・12、岩波書店)所収。
- 2) 水村美苗「見合いか恋愛か 夏目漱石『行人』」(「批評空間」1, 2号、1991)
- 3) 佐々木英昭は「男の絆 『行人』の同性的社会」(『「新しい女」の到来 平塚らいてうと漱石』、名古屋大学出版部、1994)において、一郎や二郎が「男の絆」によりかかることで異性であるお直を、排除していると指摘している。なお、高田理恵子も「文科大学の学者ということ あえて品位を欠いた考察」(『漱石研究』15号、2002・10)において、二郎に精神的「同質愛」があると指摘している。